



お正月は和室で…。 もう一度、和室の価値を考える！

昔に比べ、新築住宅では和室が減りつつあります。もちろんマンションやアパートでも和室のない間取りも増えてきました。理由としては、現代の生活スタイルの変化が考えられます。そこは最も日本人らしく居られる空間でもあります。お正月や何かの行事がある時には、家族揃って和室で過ごす事も暮らしに変化ができ、味わいがあります。



「和室」の良さを知ろう…

最近では、洋風の住宅が多くなっています。そんななかで「和室は必要なの？」とか「和室をやめて洋室をもう一部屋！」という方も増えています。そこで、和室にしかない様々な魅力について考えてみました。

きちんとした和室の定義づけはありませんが、障子を通して差し込む明かりや、畳の香り、心落ち着く空間は、まさに日本人の心の原点と言えます。和室は機能的にも優れていて土壁（現代では珪藻土を使用した壁材もあります）や畳には吸湿性があり、湿気の多い日本の気候風土に適しています。そこからも古くからの日本人の家づくりの知恵がうかがえます。

ただし、最近では和室も暮らしの変化に対応して姿を変えてきました。畳を敷いてない板張であっても、コンセプトが和風なら和室と言えなくありません。極端に言えば、和室にソファやテーブルを置くこともできます。アンティークな家具を置き、絨毯を敷けば、明治、大正のイメージを現代に活かした使いやすく、しかもオシャレでノスタルジックな和室を演出することもできます。

「和室」の種類を知ろう…

最も古式的な和室は「寝殿（しんでん）造り」といわれる形式で、平安貴族の住居に使用されたものです。仕切りの無い大きな部屋を簾や屏風で仕切っているのが特徴です。武士の時代になって和室は「書院造り」に変化しました。「寝殿造り」と異なり、襖や障子で居室をきちんと間仕切るようになりました。立派な床の間や書院、床脇も備えています。床柱も、それなりに見栄えがするものが選ばれます。さらに「書院造り」を簡素化し、趣のあるものに変化させたカタチが「数寄屋（すきや）造り」になります。茶室として生け花等を楽しむために使われる形式です。

現在、最も多く採用されているのは「書院造り」をベースに、多少簡素化された和室です。省スペースですが、伝統的な床の間の様式等を守って造られています。

次に、最近増えているのが「モダン和室」と言われる新しい感覚の和室です。一目見ただけでは和室とは思えませんが、簡素化された床の間や畳が使用されています。使い方も様々で、客間として、自由にくつろげるリビングとして、趣味の部屋として使われる場合もあります。

和室ならではの各部の名称を知ろう！

和室には、洋室には無い建材や技法が使われています。聞き慣れないものもあると思ういますが、簡単に解説します。

①床の間（とこのま）

畳から一段高くした場所を設け、掛け軸をかけたり、生け花や置物を飾ったりして演出します。

②床板（とこいた）

床の間の床板のこと。木目をきれいに磨き、見た目に美しいものが使われます。

③敷居（しきい）

建具の下部にあり、建具を開閉するための溝が設けられた横木のことです。



④長押（なげし）

柱から柱へつなげる横木。構造的に柱を連結するためのものですが、現在は装飾として使われています。

⑤床柱（とこばしら）

床の間のイメージを決める大切な柱。使用する木材や仕様は様々で、和室のタイプで決められます。

⑥付書院（つけしょいん）

床の間から張り出した棚。座卓位の高さに棚板を設け、明かり障子を入れます。

